

🐾 おはようございます。今日、四月十三日は、「決闘の日」なんだそうです。どうして決闘の日と呼ばれるようになったのかというと、今から四百年以上も前の慶長十七（一六一二）年、四月十三日のちょうど今頃、つまり朝の八時くらいに決闘をしようとしていた二人がいたことに端を発します。

一人は佐々木小次郎さん。一メートル以上もある長い刀「物干しざお」とあだ名をつけられるような長い刀を、自由自在に扱える人だったようです。もう一人は、宮本武蔵さん。右手と左手、両手に刀を持って戦う、「元祖二刀流」のお侍さん。

武蔵さんは絵も上手な方で、その絵の線の流れからすると、どうも左利きだったのではないかと言われています。それなら、左右に刀を持って上手に扱えるのも納得です。

また、武蔵さんは手裏剣の達人でもあったとか。川に浮かべた桃に、三十センチほどの短い刀を投げつけて、桃の種の中心を刺せるようなすごい人だったようです。

その二人が決闘することになった場所が、現在の山口県にある「船島」という島。この日の決闘の様子は、武蔵さんが亡くなってから百年後に書かれた「二天記」という本に載っていますが、なにせ亡くなってから百年以上もたって書かれた本なので、どれくらい

正確かは保証できませんが、こんな話になっています。

小次郎さんは早めに船島に着き、約束の八時を今か今かと待っていたようです。二時間遅れの十時頃、武蔵さんが到着。意図的に出発を遅らせ、朝食もゆつくりととり、船（ろ）の船のオール（のこと）を削って作った木刀を持って登場したようです。

待たされ続けた小次郎さんは、「臆したな武蔵。己はなんぞ遅れたるや。」「武蔵、オレのことが怖くて、ビビッて遅刻したのだから」というようなことを言ったようですが、武蔵さんはそれに答えず。

小次郎さんはますます怒って、すらりと「物干しざお」を抜いて、鞘（さや）を投げ捨てたところ、「小次郎敗れたり、勝者、なんぞその鞘を捨てん。」「小次郎、そっちの負けだ。勝つはずの人間なら、刀を納める鞘が必要ならば。なんでそれを捨てた。」と、言ったとか。



勝負は一瞬で終わりました。小次郎さんの「物干しざお」は武蔵さんの鉢巻きを切り、同時に武蔵さんの船で作った木刀が小次郎さんの頭を直撃。小次郎さんは倒れ、倒れざま

に横に払った一刀は、武蔵さんの膝の上あたりの服を切り裂きましたが、小次郎さんは脇腹の骨を砕かれ絶命。

その後、「船島」と呼ばれていた島は、小次郎さんの剣の流派である「巖流」からとって、いつの頃からからか「巖流島」と呼ばれるようになったのだとか。

朝から物騒な話をしましたが、この武蔵さん、「我、神仏を尊びて、神仏を頼らず。」とか、「我、事において後悔せず。」というような言葉を残した方です。

これは、「私は、神様や仏様を敬い、尊ぶが、命がけの戦いときに、神仏に頼って勝とうとしたことはない。」とか、「数々の戦いを経て、反省、改善はするが、後悔したことはない。」

というような意味の言葉です。人生において六十数回の戦いで、一度も敗れたことなかったという武蔵さんの精神の強さは、見習うべきところがありそうです。

神さまに頼るのみで、自分で努力をしないのはもつてのほか。後悔する時間があつたら、反省し、改善する時間に充てること。こんな戒めが武蔵さんの言葉から読み取れそうです。あつ、くれぐれも言っておきますが、今日「決闘の日」だからといって、校内で「決闘」をするのはご法度とします。

（立教小学校校長 田代 正行）